

自、
上、
鑑、
焉。

秋期行軍の歌

助教授

園哲雄

秋の思ひを、各自
軍の學び、せんものと

逆立つ髪の、恨をば

光は澄みて、八ツ足らぬ

枕に近き雁の聲

わくる袂に、れさまさる

叢つゝき、むらくと

われに語合、心持せり

見にけん夢の、古事は

まだあらかねの、地の上に

さらす錦の、もみぢ葉は

凝さんよりは諸共に

ゆくやちまたの、ゆきかひに

益荒丈夫が、取る銃に

七尾の城に武士の

聞し哀れや、いかおりし

岡邊の薄徳に出でよ

集ける虫の、聲々は

尋ねよ尋ね、能く尋ね

即現の、龜鑑あり

墮ちぬぞ勵め、つくづくと

赤き心に、照りまがふ」

明治廿三年の秋期行軍の歌

全

室すみわたる、秋の野に

時ぞ來ぬめる、いざ子とも

人よつ虫の、聲すあり

われかとゆきて、吊らはん

駒よ鞍おけ、たつ田山

唐紅の、色こに

心を野邊に、打ち出でよ
舊にし跡の、ゑのばれて

思ひえらせて、觀る月の

鎧の袖を、らたしきて

萩の上風、萩の露

戦やは人を、招くかや

窮めや窮め、彌窮め

世は漁季あれど、日や月は

見渡す四方の、嶺に尾に

手向のぬさと、ありにけり」

織れる錦の、もみぢ葉は
菊池氏
三世に續きし、楠の

誠を遠き、九重の

五百世の色の、ろの薰り

皇帝に、つくし渴

うつるふ世ころ、あかりけれ」

鼠の群は、幾萬つ

君ぞ雄々しき、さうらかた

胄は破れ、乗る馬は

醜の醜臣、うち罰め

小貳の狗や、大友の

河打渡り、武光の

皇ら軍の、魁に

是やろの身は、死せりとも

治まるとても、治まりに

はらひ盡して、歸るさに

いく代の後も、經る人の

猶生けりとは、言ふあらん

心比へて、皆人の

雷、あして、當時の

遍照院の、鐘の聲

一日に千里、往きつ可し

哀れはかある博多ある

車止めつ、武士の

久留米ノ

高山正之

怒を帶々に、さもよたり

くるめの里の、名にし負ふ

御楯の軍寄り集ひ

轟振り立てゝ、あく袖の

佛の道の、うをあらで

想ふもづらき、武時の

櫛田邊りに、くすしくも

汽 車

高山ぬしの、墓は、

露にそばちて、忍ぶかる」

效はざらめや、當時に

生きて乗るてふ、火の車

君の馬には、あらねども

涼笛の聲の、立ち消えて

菊池氏

是やろの身は、死せりとも

治まるとても、治まりに

はらひ盡して、歸るさに

いく代の後も、經る人の

猶生けりとは、言ふあらん

心比へて、皆人の

雷、あして、當時の

遍照院の、鐘の聲

一日に千里、往きつ可し

哀れはかある博多ある

車止めつ、武士の

誠を遠き、九重の

五百世の色の、ろの薰り

うつるふ世ころ、あかりけれ」

手向のぬさと、ありにけり」

公の操に、また一つ

音にきくちの、菊の池

誠を遠き、九重の

五百世の色の、ろの薰り

うつるふ世ころ、あかりけれ」

手向のぬさと、ありにけり」

公の操に、また一つ

音にきくちの、菊の池

元寇紀念

上矢の鏑一筋に
寄せ来る濤の、立ち返り

思ひ切りつゝ、元寇の
昔の跡は、久堅の

紀念碑さして、過往ければ
雲に聳うびゆる、碑の

高き功を現はるゝ」

歩をうらに、はこ崎や

書し玉ひし、四ツ文字は

踏と見ぬ、天の橋立も

都にはあらぬ、志賀嶋に

たゝらの濱、覽東あ

巖と化りて、萬代に

立花山は、雲晴れて

搖き鳴す琴の、松が枝は

岩屋の城に隼人の

高橋大人は、今もあは

浅芽が原の、礎は

觀音寺のあと、いかあらん

風は刃の、ごとあれど

怨は鳴神、あすべさや

さればかしこう天皇の

千代の松原、神さびて

社に掛けて、海原や

かくやとばかり、見えにけり

誰か堀り出でし、いそ國の

香椎の宮に、霧立ちて

韓の國王、歸順し

われを送るか、刈萱の

いく代の霜や、凌ぎけん

薩摩男と、潔く

のあれ木々の、もみぢ葉に

木の丸殿の名残あり

月は鏡に似たれども

千々の憂ひは、斷たざりき

神の倭の、魂は

大御言にも、敷島の

延喜の帝、かしこくも

海の中道、はるばると

潮の八撫路、さゝ波や

王の印や、いかありし

名嶋の磯の、帆柱は

御棱威を長く、傳ふらん

關屋の跡の、秋風に、

色染川は、名のみにて

戦ひしせし、ろの名さへ

入相の鐘、聲無さは

着し濡衣は、照し得ず

誠に梅は、千里飛び

漢の才をぞ、かね得たる

大和錦に、織りてころ

唐紅の色も有れ

寶満山
心の池

學ばむ人の心にぞ

いふべかりけめ、詩に

涙の多きに勝むとは

これをも慕ひ、彼もまた
宝満山の月影の
いとすむべき、この秋は
書讀む人とある勿れ
鬼とりひし、武夫の

考ひ合せ、打渡る

光りは遠き、後までも
獨わが身の秋どころ

到る處の目に觸れて
今日の心ろに知られけり

北豊旅中作

小倉樓上夕景 羽石重雄

旅懷悠々獨倚樓。沙洲人散晚鐘幽。
波間日落、万燈點。知是灣々夜泊舟。

三十六灘晴色開。烟波杳渺氣佳哉。
飛鴻點々入雲去。泛々布帆加一來。
輪發小倉向晚汀。回頭北望是蒼溟。
可驚車輶疾於箭。遠浦青燈亂似螢。

又 小倉歸途滌車中作

夏晚散步

朝梁臯

玉露稻香兩適宜。貪看風景步遲々。
認來一幅佳人畫。山似翠鬟月似眉。

二
溫山磨出碧琉璃。新月一痕影似眉。
如箇風光看不厭。三叉村路立多時。

臨水樓宜避暑。樓清風一夜偶來遊。
倉津波穩萬家月。海氣淒涼又近秋。

仲津路上望周防灘。行看三十六灘舟。
水禽亂喚夕陽頭。遠浦堪驚檣影稠。一簇蘆

又